

ヴァーチャル・ミュージアム

による

臨地型アドボカシー

廃物資源利用からアフリカの貧困を考える

湖中真哉

□ 臨地研究とアドボカシー

「アドボカシー」(advocacy)という概念は、「擁護」, 「唱道」, 「政策提言」などと訳されており, 今日, とりわけ途上国の貧困問題に関連して, さまざまな意味で用いられている。国際NGOによるアドボカシー活動が挙げた最大の成果は, 最貧国の債務帳消しである。2005年9月, 世界銀行と国際通貨基金は, 最貧国の約6兆円の債務帳消しを発表したが, これにはG-CAP (Global Call to Action against Poverty)によるアドボカシー活動が影響したと言われている。つまり, 開発援助の脈絡で言えば, アドボカシーは, 道路や学校をつくったりするハード面の実践に対して, 世論形成や政策提言にかかわるソフト面の実践といえる。

もちろん, インフラの整備が立ち後れているアフリカにおいて, さまざまな開発プロジェクトの実施によるハード面での直接支援が急務であることは疑いを得ない。しかしながら, 開発援助や国際協力の一方向の担い手は市民であり, 開発援助におけるソフト面の実践がもつ役割も同様に認識されねばならない。

北東アフリカ地域の研究者は, 長年にわたる臨地研究を積み重ねてきた。しかし, それは, こうした「アドボカシー」とは無縁の研究活動として捉えられがちであった。ここで, 臨地研究をもとに展開するアドボカシーを「臨地型アドボカシー」と呼

ぶことにしたい。この概念はたんなる研究情報公開を意味するのではなく, 臨地研究者がその研究情報を公開することにより, アドボカシーを臨地的に再構築していく実践を指す。本稿では, 筆者が実践してきたヴァーチャル・ミュージアムのプロジェクトを事例として, 北東アフリカ地域研究における「臨地型アドボカシー」の可能性を考えてみたい。

□ ヴァーチャル・ミュージアムの構成と方向性

筆者は, 「東アフリカ・マー系文化のヴァーチャル・ミュージアム」を制作し, 2007年3月からインターネット上で公開している (<http://africa.u-shizuoka-ken.ac.jp/>)。ヴァーチャル・ミュージアムの展示対象である東ナイル系マー系の人々は, 東アフリカのケニア北部からタンザニア北部にかけての広大な乾燥地帯に居住しており, 個別には, マーサイ, アルーシャ, サンプル, チャムス, ドロボなどと呼ばれる人々が含まれる。

筆者は, 1992年以降, おもに, ケニア中北部に居住するサンプルを対象として調査を行い, 研究成果を公開してきた。また, 文部科学省科学研究費の助成を受けて, サンプルの民族誌的情報を学界以外に対して公開することを目指して「オンライン民族誌」を作成し, 1998年以降, インターネット上で公開してきた。その後, 筆者は, その運



ヴァーチャル・ミュージアムのトップページ

営経験を踏まえてさまざまな工夫を行い、サイトを全面改装して、2007年3月に、ヴァーチャル・ミュージアムの公開を開始した。ここでは、研究成果を踏まえて、サンプルの廃物資源利用をおもに展示公開している。

この展示の基礎になっているのは物質文化のサーヴェイである。筆者は、写真家のピーター・メンツェルが代表となって実施した国際家族年の企画「マテリアルワールド・プロジェクト」に触発され、2003年以降、サンプルの一世帯が保有する全ての日用品の写真を撮り、その日用品について質問する方法で物質文化の調査を実施してきた。サンプルの人々は、今日、決して伝統的な物質文化だけに依存しているわけではなく、商店で購入した商品を盛んに利用している。この調査では、伝統的な乳容器であろうと、ヤカンやラジオのような近代的商品であろうと、すべて同様に扱う方法で調査した。

ヴァーチャル・ミュージアムのおもな構成と展示の方向性は以下の5点である。

(1) 研究者よりの「民族誌」から、より利用者の

立場に立ち、閲覧者の体験性を重視した展示形態を目指した。それゆえ、以前の「オンライン民族誌」から「ヴァーチャル・ミュージアム」にサイトの方向性を転換した。

(2) 展示方法を工夫して、「くだらないもの」、「とるに足らないもの」というアフリカの廃物資源利用に対する一般的な評価を転換することを目指した。アフリカの市民が廃物資源利用によってつくりあげてきた物質文化は、従来、ある種のまがいものとみなされ、近代的な美術品としても、伝統的民俗芸術としても、評価される機会がほとんどなかった。廃物資源利用による物質文化を、ヴァーチャル・ミュージアムのなかで美術館のように展示することによって、その価値を見直したり、再評価したりする機会をつくりたいと考えた。

(3) 民芸品の展示によって、アフリカの伝統をステレオタイプ・イメージとして強調するのではなく、廃物資源利用の展示によって、グローバル化を生きる現代アフリカの自然な日常を表現することを目指した。以前に、オンライン民族誌の閲覧者から、シャツとジーンズを着たサンプルの青年の写真を展示した際に、サンプルの人々は常に伝統的な衣装を身にまとっていると思っていたので、意外だったという感想をいただいたことがある。そこで、商品経済と民俗技術の両方が組み合わせられた廃物資源利用は、現在のアフリカの人々の日常を、閲覧者の方々に理解していただくのに好適だと考えた。

(4) 学生の環境教育のための教材づくりを目指した。現在、環境教育の重要性が認識され、さまざまな環境教育の教材が出版されている。生態人類学や環境人類学は、これまで自然と共生してきた人々の調査研究成果を蓄積してきたが、そうした蓄積を活かして、環境教育の教材をつくることはできないかと考えた。以前のオンライン民族誌では、イギリスの8歳の小学生からアメリカの大学院生まで、幅広い対象の学生から電子メールをいただいた。そこで、幅広い対象の学生に、環境教育の教材として利用していただくことを目指した。

(5) ヴァーチャル・ミュージアムという新しい形態をとることによって、調査対象者が使用

している日用品を奪わない博物館の在り方を
目指した。実物を展示する通常の博物館では、
調査対象者がこれまで使用してきた日用品を
買い上げた結果、生活に影響を与える可能性
がある。しかし、ヴァーチャル・ミュージア
ム展示の場合には、実物を持ち帰る必要はな
く、写真を撮影し、その日用品について質問
するだけであり、実物展示とくらべると、調
査対象者の生活に影響を与えることは、はる
かに軽微と思われる。

ヴァーチャル・ミュージアムのおもな構成上の 特徴は以下の3点である。

- (1) サイト構成に「ミュージアム」のメタファー
を全面的に採用した。サイトの各ページは、
「ご案内」、「チケット」、「展示室」、「来館者帳」、
「書籍部」、「館員室」、「出口」などすべて「ミ
ュージアム」の一部として構成されている。
- (2) マルチメディア情報とテキスト情報の提示
方法を使い分けた。テキスト情報は更新が容
易なウェブログベースに、マルチメディア情
報はフラッシュベースにして提示方法を分離
した。
- (3) 著作権に対して留意しながら構成した。こ
のサイトでは「チケット」は著作権に関する留
意事項を意味しており、「私は以上のお約束に
同意して展示室に進みます」をクリックして、
「チケット」を入手しなければ展示が閲覧でき
ない構成になっている。著作権については、
「クリエイティブ・コモンズ・ライセンス」を
利用し、さらに、「野蛮」、「未開」などの差別
的・侮蔑的表現を用いた環境のもとでは、複
製、頒布、展示、実演することについても一
切禁止します」という条件を追加している。

□ ヴァーチャル・ミュージアムの オーディエンス民族誌

つぎに、こうしたヴァーチャル・ミュージアム
がどのように閲覧者に受けとめられたのかを、カ
ルチュラル・スタディーズの研究者にならって、
「オーディエンス民族誌」として記述する。

このヴァーチャル・ミュージアムは、筆者の勤



ヤカンを物質文化として調査

務校である静岡県立大学の授業においても教材と
して使用している。ヴァーチャル・ミュージアム
がどのように、受講生に受けとめられているのか
を調査するために、筆者は、2008年5月14日に、
ヴァーチャル・ミュージアムに関する質問紙調査
を実施した。対象は、平成20年度「現代社会研究
6A」の受講生で、国際関係学部の1年生から3年
生が中心であり、有効回答数は27であった。質問
紙は、選択式と自由記述式を組み合わせ、六つ
の質問項目により構成した。

選択式の各質問に対する回答の割合を検討する
と、「自分がこれまでアフリカに対して持っていた
イメージとはどのようなものですか」という質問
に対する回答は、「貧困や紛争」が32%と最も多く、
国際関係学部学生ということもあり、貧困や紛争
のイメージが強いことがうかがえる。「ヴァーチャ
ル・ミュージアムを閲覧して、アフリカの生活や
文化を身近に感じることができましたか」という
質問に対しては、「ややそう思う」が52%と半数以
上を占めた。ある程度、身近に感じることでき
た学生がいたことがわかるが、学生の多くが強
く感じるまでには至っていないことも明らかにな
った。「ヴァーチャル・ミュージアムを閲覧して、自
分がこれまでいただいていたアフリカについて
のイメージは少し変わりましたか」という質問に
対しては、「強くそう思う」という回答が45%と半数
近くを占めた。ヴァーチャル・ミュージアムは、学
生のアフリカに対するイメージをかなり変えたこ
とが分かる。「アフリカの生活や文化を学ぶ教材
として、ヴァーチャル・ミュージアムは役に立つと

思いますか」という質問に対しては、「強くそう思う」が81%と大半を占め、大半の学生から教材として好意的に受けとめられたことがわかる。

つぎに、記述式設問に対する回答を検討する。記述式設問では、ヴァーチャル・ミュージアムに対する感想や意見を自由に記してもらったこととした。

◇◇◇

廃物資源利用に対してのコメントとしては次のような回答があった。

- ▶ アフリカの人々が廃物資源を再利用していることも知らなかったので、おどろきました。植物など、身近なものを使った文化というイメージがあったので、想像もつかないような方法で多くのものが再利用されていて、すごいなあと思いました。
- ▶ 私たちはリサイクルや再利用を考えると、どうしても現物のままというよりは工場などでの加工が必要だと考えるけど、もっとシンプルな方法で、再利用もできるんだと分かった。しかも、独自の文化の中に上手にとり入れているのがすごいと感じた。
- ▶ アフリカの中にも、グローバリゼーションにうまく適応してすばらしい生活を送っている人たちがいるということに衝撃をおぼえました。このような優れた技術を持っている人々がいるアフリカに、私たちが学ぶべきことは多くあると感じます。

このように、廃物資源利用の技術に対する驚きや敬意が綴られており、学ぶべき対象として学生たちが受けとめていることもわかる。

◇◇◇

従来のアフリカに対するイメージとのギャップに関するものとしては、次のような回答があった。

- ▶ 利用できるような物を独自の技術で再利用し

ている様子は“何もできないで苦しんでいる”というようなよくテレビで耳にするアフリカのイメージを一変させてくれた。

- ▶ 貧困や紛争のイメージが強かったが、拾ったものを用いて、おしゃれを楽しんでいる様子を見ると、私たちといっしょなんだなと思った。
- ▶ 物を直して使う習慣がなさそうなイメージを持っていたので、プラスチックを溶かしてポリタンクを直している姿は驚きでした。
- ▶ アフリカの人々が生活用品として使用しているものは、自然の中にある物だけだと思っていたが、プラスチックやタイヤ、傘の骨など日本で身近にある人工的な廃物資源をふんだんに再利用していることに非常に驚いた。
- ▶ 現代的なものを使って、とても工夫して生活しているのを知って、アフリカの人が古典的なものや方法に固執しているのではないということがわかった。
- ▶ 彼らは大雑把ではなく、むしろ繊細な技術の持ち主だと思うようになった。

このように貧困、紛争、浪費的、大雑把といった受講生の従来のアフリカ・イメージが、ヴァーチャル・ミュージアムの閲覧によって、修正されたことが分かる。また、学生たちにとっては、アフリカといえば、自然物を利用した物質文化のイメージが中心であり、アフリカの地方にもポリエチレン容器のような工業製品があること自体が意外だったようで、廃物資源利用による物質文化に触れることで、伝統に偏重したアフリカのイメージを修正できたことがわかる。

◇◇◇

ヴァーチャル・ミュージアムそれ自体に関するものとしては、次のような回答があった。

- ▶ 写真やムービーも楽しめましたが、本物の美術館らしい構成もとても良いと思います。見やすいし、美術館にいるような気分になりました。また、本物の美術館のように堅苦しくなく、手軽に見ることができるというのも魅力的だと思います。

- ▶ とてもしっかりとシステム化されていて、一般の人は少し敬遠しがちにはなっていると思いますが、研究成果を乱用されないためには、重要なことなんだなあと感じました。私たち学生だけでなく、色々な人々にぜひ見て頂いて、アフリカについての考え方を少しでも変えてくれる人が増えてくれれば良いなあと思います。
- ▶ 自分から美術館などに行かない限り見れないものを、パソコンで見れるのはすごく良いと思いました。スクリーンに映るのでメモもとやすいです。多くの人に教えてあげたいです。

このように、ヴァーチャル・ミュージアムという構成をとったことや、博物館や美術館より比較的簡単に閲覧できる点、著作権に対する配慮等の点が、学生に評価されたことがわかる。

□ 臨地型アドボカシーの可能性

最後に、このようなヴァーチャル・ミュージアムの実践を通じて考えたことに基づいて、臨地型アドボカシーの可能性について考えてみたい。国際NGOによる従来のアドボカシー活動においては、貧困や紛争にうちひしがれる悲惨なアフリカというイメージが強く強調されてきた。これに対して、臨地研究者は、少なくともフィールドワークを通じて、そうしたイメージとは異なる北東アフリカの姿に触れてきたと思われる。少なくとも、筆者は、サンプルのような極度の貧困状況にある社会にも、見事な廃物資源利用の技術が生まれていることを、フィールドワークを通じて学んできた。こうしたアフリカの在来の世界の活力を伝えることも、貧困や紛争を伝えることに劣らず重要なことのはずであるが、その意義は、残念ながら、

十分に認識されているとは言い難い。先進国の知識や技術をアフリカに導入するだけではなく、アフリカに対するさまざまな誤解やステレオタイプ・イメージを修正して、日本の、とりわけ若い世代に、ソフト面を適切に伝えることも、相互の敬意に基づいた国際協力の在り方を創りあげていくためには、必要なことであると思われる。ここで紹介したヴァーチャル・ミュージアムの試みは、微力ながら、こうした認識の転換に成功し、開発教育・環境教育に成果をあげつつある。

この意味において、貧困や紛争といったイメージだけではなく、そうした厳しい状況のなかで生み出されているアフリカの在来の活力ある世界を、臨地研究者以外の方々に、少しでも知っていただくことは重要であると思われる。こうした臨地側アドボカシーが成果を挙げれば、先進国からの一方的な押しつけになりがちである、とよく指摘されているアフリカに対する開発や援助の在り方を、よりアフリカの在来の世界を考慮したものに変えていく世論形成や政策提言の可能性を拓き得るのではないかと、筆者は考えている。

(こなか・しんや／静岡県立大学)

謝 辞

現地調査でお世話になった東アフリカマー系住民の方々にお礼申し上げます。また、この研究は、報告者を研究代表者とする以下の文部科学省科学研究費補助金の助成を受けて行われました。記してお礼申し上げます。平成14-15年度若手研究(B)「東アフリカ・マー語系社会における物質文化と商品経済の変遷に関する人類学的研究」(課題番号: 14710220)、平成16-17年度萌芽研究「東アフリカ・マー語系社会における廃物利用のヴァーチャル・ミュージアム構築」(課題番号: 16652064)、平成20-22年度基盤研究(B)(海外学術調査)「東アフリカ・マー系社会の地域セーフティ・ネットに基づく在来型難民支援モデルの構築」(課題番号: 20401010)。